

研究におけるシナリオ作り

浦上昌則
(南山大学人文学部)

はじめに

研究におけるシナリオといっても、ピンと来ない方が多いと思う。私自身も、これまでにそのような言い方は聞いたことがない。“研究計画”と言い換えてもいいのであるが、“研究計画”というと、「このような調査方法を使い、こう分析して...」といった、一つもしくは若干数の研究の組み立て方といったイメージが強いように感じる。ここで言う“シナリオ”には、個々の研究の関連性はもちろん、時間的な計画性や発表方法・時期などの問題までを含めたものという意味を込めている。さらには、もしうまくいかなかった場合の対処も含んだ計画と考えていただきたい。このようなシナリオは、永く研究を続けて来られた方々は経験知としてお持ちのことと思う。そして、それがある程度できてきたとき、本腰を入れて研究に取りかけられるのではないだろうか。ここでは、シナリオを作成するうえでの留意点などを述べていきたい。

なお、ここでは個別の研究計画を“個別シナリオ”、修士、課程内博士論文など一連の研究群の計画を“全体シナリオ”と呼んで区別し、特に前者を中心に話をすすめたい。また、主に仮説検証的な研究をターゲットとしていることを断っておくべきであろう。そして、非常に個人的な意見であるため、以下のようなシナリオの作成手続き、内容をまねるのではなく、必要などころだけ取り入れていただけたらと思う。

個別シナリオの作成

個別シナリオと関連して、不思議に感じる点...

- ・なぜ当初の目的意識と、研究内容が乖離してしまうのだろう？
- ・なぜやみくもに先行研究を読みあさるのだろう？
- ・なぜ複雑な理論構成をしていながら、単純な調査をしてしまうのだろう？
- ・なぜ無理をしてまで評定尺度を利用するのだろう？
- ・なぜ、データを集めてから分析で悩むのだろう？
- ・なぜ研究の進行と論文化の間にタイムラグが生まれるのだろう？

研究の作り方と論文の作り方とは、手順や思考の流れが違うことは、いくらか研究を積み重ねてきた方は理解されていることと思う。しかし、学部生や修士課程の学生の中には、「研究というものは問題の所在を指摘することから考えなければならない」「先行研究の中に自分の問題意識を位置づけなければならない（もしくは先行研究の中から問題点を指摘しなければならない）」というように、公表されている論文の構成の流れに縛られすぎているような学生も多い。これは、私もそうであったが、どうやって研究を進めればよいかわからない、つまり研究という行為の流れがわからないからだと考える。何をどういう順で考えれば自分の考えを充分に発揮できる研究につながるのか、そのあたりを指摘しておきたい。

個別シナリオを作成するにあたり、まず「論文は読者に何かを正確に、効率的に伝えるために書かれたものであり、研究者の思考、手続きの流れを記したものではない」こと、すなわち「論文は一連の研究的作業を再構成したもの」であることを理解しておく必要があるだろう。論文構成（執筆）上の流れを研究の流れだと理解してしまったがために、先に指摘したように先行研究や既存の理論にオリジナルな考え方が制約されてしまっている場合を見受ける。“ひとまず”論文構成（執筆）上の流れから自由になることは、研究をより自分の興味・関心に近づけること、興味・関心をより研究に反映させることに役立つと考えられる。

このようなスタイルで研究に取りかかるとすると、最初の作業は「ひらめきや思いつきを仮説にすること（構造化すること、と表現することが妥当なのかもしれない）」になる。それも頭の中で構成するのではなく、文章としてきちんと表現するのである。そうすることによって、まずは「～について知りたいのですが...」といった問題意識では、そこから進展することができないことを理解できるだろう。また「ひらめきや思いつき」のレベルでよく見られる、概念や仮説に含まれるあいまいさがはっきりしてくると思う。そしてそのアイデアが他者の理解・納得を得ることができるとすれば、さらに研究を進行させても大きな問題は生まれにくいと思う。なおこの段階では、極端な話をするとは先行研究の有無や、その結果などは問題で

はない。

次に考えるべきことは、どのようなデータが必要なのかを具体的に考え、同時に分析の計画をたてることだろう。ここでもまだ先行研究には触れなくてもよい。自分の仮説を証明(傍証)するには、どのようなデータが必要であり、それをどのように分析し、どのような結果が得られたらよいのかを具体的に想定するのである。データ収集の方法は、得たいデータの内容によって変わるべきものである。質問紙がよいのか、その他の方法の方が適しているのかなど、データにこだわる中で決定してほしい。なお、“質問紙=評定法=統計処理=面接や観察、実験よりも楽”というイメージを持っている学生に出会うことがままあることは付記しておこう。楽だからかどうかはわからないが、安易に評定法にはしる傾向があるように感じている。

また、ここで分析方法の概略ができていれば、データを集めた後の作業が楽になるはずである。統計処理ソフトの出力結果を山のように抱えて、「どれを見ればいいですか」と聞きに来る学生がいないわけではない。このような場合は、大抵、知っている分析を全部やってみた結果が山になっているのである。資源はもちろんだが、締め切りのあるものなので、時間のむだ遣いと感じてしまう。

なお、この作業を行っているとき、時に分析計画が作成できないという壁にぶつかることがある。統計処理に不慣れな学生がよく立てる仮説である、「AがBに与える影響はCによって変化する」といった場合などがこれに該当しよう。「Cの得点で2群(もしくはそれ以上)に分けて、それぞれの群でAとBの相関係数を算出し比較する」といった計画が出されるのだが、これでは統計の誤用になってしまうだろう。このような分析上の壁にぶつかった場合、とるべき方法は2つしかない。まだ知識として持っていない分析方法を習得して対処するか、あるいは仮説を修正するかである。

これらのデータと分析についてがクリアできるようであれば、“研究になる研究計画”ができ上がってきていると思われる。またこれらの点が、その研究者の問題に対する姿勢を明確に示すポイントとなるはずなので、じっくりと腰を据えて取り組むべきといえよう。

このあたりまで作業が進めば、並行して先行研究を丹念に調べる“必要性”が生じてくる。同じような問題意識を持っていた人がいるのか、その人はどのような方法を使ったのか、結果はどうなったのか、それは自分の知りたいものと“全く同一”のものなのか、などといった点を検討するのである。自分なりの研究の枠組みがあれば、先行研究の利用の仕方が明確になる。先行研究をどういった視点から調べるのか、ということが明確になっていけば、過度に先行研究に振り回されることもないであろう。

さらにこのように作業を進めていけば、研究計画の立案と論文化をほぼ同時に進めることが可能である。結果等の細かなことは無理であるが、問題、方法、結果の大枠は書くことができるであろう。また、実際に書いてみることによって、自分の論の弱点や不勉強な点も見えてくると思われる。このような並行作業ができれば、データを得てそれを分析して“から”論文化を進めるという場合の時間的な遅れが解消できるはずである。

最後に、先行研究の位置づけについて触れておこう。先行研究は“利用する”ものであり、それに振り回されるべきものではない。そのためには、なぜそれを読んでいるのかをはっきりとさせておく必要がある。どのような目的で読んでいるのかがはっきりすれば、自然と読み方も変わってくるはずである。また、どの論文を読めばいいのかという絞り込みの基準も変わってくる。限られた時間内で読書の効果を最大にするには、先行研究の位置づけを意識化しておくべきだろう。

全体シナリオの作成

全体シナリオと関連して、不思議に感じる点...

- ・なぜ研究計画を立てにくいのだろう？
- ・なぜ研究予定は狂ってくるのだろう？
- ・なぜ研究は進まないのだろう？
- ・なぜ収集したデータに固執してしまうのだろう？
- ・長い論文って、どうやって書けばいいのだろう？

修士論文や課程博論文を作成する場合には、ぜひ作っておきたいシナリオであるが、これが非常に難しい作業だということは、実感としてわかっている。またそれを忠実に実行することはさらに難しい。しかし、修士課程、博士課程といった限られた時間内で一定の成果を求められる状況下であれば、どうしてもこのシ

ナリオを描いておくべきだろう。以下では、重要と考えられるポイントに絞って記しておく。

- ・全体の構成を策定する

まず、研究群の結論として何を言いたいのか、どこにたどり着きたいのかを“かなりの程度まで”明確にしておくべきである。そこから、それにたどり着く道順を考える。つまり個々の研究をブロックにたとえ、それぞれの位置を明確にしておくことによって全体像を捕まえておくのである。個々の研究に集中してやっていると、最終的にそれらが一つのまとまりをなさないことにもつながりかねない。なお、“かなりの程度まで”と記したのは、初めに設定した全体構成を絶対のものと思わず必要はなく、個々の研究結果次第である程度の修正を施す余地を残しておいたほうがよいと考えるからである。

- ・研究ごとに重要性を与える

全体の構成ができたら、どうしても意に沿った結果を出さなければならないといった中心的研究が明らかになるだろう。それがうまくいかないと、研究の全体像がくずれ、それぞれの研究がバラバラになってしまうような鍵となる研究である。このような位置にある研究は、納得がいくまで（論文構成上の齟齬をきたさない程度の結果が得られるまで）繰り返したり、改訂を続ける必要がある。逆に、全体構成上で本筋に無いものに多大な時間と労力を割くことも考えものである。このように、研究ごとに重要性や実施の優先順位を決めておけば、最悪の場合にも対処しやすいだろう。

- ・あきらめ、割り切りの意思決定を素早く行う

データを収集し、予定の分析を行ってみたところ、予想とは違う結果が得られることがある。これは、どんなに緻密に理論構成をしても、また研究計画を策定しても避けられないことだと思う。重要性の高いものであればあるほど、迅速で根本的な対応が必要であるし、重要性が低ければ、あきらめるという選択をしても良いだろう。しかし、せっかくのデータをあきらめることには抵抗感を感じる方も多いのではないだろうか。データに対するこだわりは必要だが、それに執着することによるメリットはないと思っている。

- ・データ収集の予定を立てる

私がやってきた進路についての調査は、年間のある時期にしかデータを収集できなかった。データを集めるのに最適な時期がある、といった研究内容は多いであろう。このような特徴を持った研究を行う場合、やり直しは次年度まで待たなければならないといった状況に陥ることもしばしばである。その時が来たら必ずデータが取れるという状況を前もって確保しておくべきである。

- ・長い論文の書き方

雑誌投稿用の論文ばかり書いていると、書き方にくせがついてしまうように思う。自分の経験上、卒論作成時は知っていることを全て盛り込んで書いた。その後、投稿用の論文を書くようになって、枝葉末節は切り取ってしまい、いかに分かりやすく簡潔に書くかを意図した。そして博論を書く段階になって、「いったいどこあたりまでを盛り込んで書けばいいのか」という問題にぶつかったのである。しかしその答えは簡単であった。最初に指摘した「全体の構成」に従えばよいのであった。今執筆している個所が、全体のどこに位置し、どのような役割を持っているかを認識しながら執筆すれば、それほど難しい問題ではないように思う。

おわりに

先日、山田昌弘著「パラサイト・シングルの時代」（ちくま新書）を読んだ。全てにおいて納得できたわけではないが、正直なところ「やられた！」という感を抱いた。なぜそのような感を抱いたかというところ、そこに描かれている青年像、そしてその背景に説得力があり、また納得できるものであったためではなく、それが青年心理学に携わっている研究者からの提言ではなかったからであった。その指摘が、社会学という切り口からでなければ見えなかったものなのかなと言えばそうではなかっただろう。心理学の諸知見のなかからでも、そのような傾向はうかがえたはずである。

このような、ある種の「ハッ」とするアイデアは、学生と話をしている中にも現れる。しかし、（例は悪いが）学会発表の場などで同じような感覚に陥る頻度は、学生と話をしているときよりも多いとは言えない。また、卒論研究などを見ていて、初めは面白い着想だと思っていたものが、研究という流れを意識し、その規格に自らのアイデアを詰め込んでいくなかで、最初の面白さが徐々に薄れていく場面にも遭遇した。

研究を円滑に進めるためのシナリオのみならず、アイデアを殺さず、その面白さを表現できる研究のシナリオのあり方についてディスカッションできたらと考えている。